

テイル形式の認知的意味

山本雅子

【要旨】

言語表現を、言語主体から独立した自律体系としてとらえるのではなく、言語主体による外部世界の主体的な接触の反映としてとらえるという認知言語学のパラダイムで、テイル形式の意味機能の統一的説明を試みた。テイル形式の意味機能は、話者が、自己の位置するグラウンドと同位置にある事象の一つを取り立てて指示し、その事象の成立を自己の今ココで解釈するという「同位置」認識スキーマの実現を反映するものであり、多義性は、その実現の仕方のバリエーションによって表出するものである。話者が知覚を手掛かりに、グラウンド内に位置する事象の成立を自己の今ココで解釈するというスキーマを核とし、認知プロセスが二種類に拡張される。一つが、グラウンドの外に位置する事象を〈引き込み〉操作によってグラウンドに位置づける心的行為であり、もう一つが、話者が自己の立脚する今ココから遠隔に位置する別の事象の成立を認識し、その事象成立位置にグラウンドを移動させ、移動させたそこで新規の事象成立を自己の今ココで解釈するというものである。

(キーワード：言語主体 スキーマ グラウンド 事象成立解釈 時間要因)

1. はじめに

日本語を教える者は、誰もが、いつまでたってもなかなか納得のいく説明ができない文法項目を幾つか抱えているものだが、テンス・アスペクトを示すとされるテイル形式もそんな文法項目の一つだろう。学習者が初級レベルであれば、テイル形式には、事象の現在における継続と結果の意味があるといった程度の説明でなんとかその場を切り抜けることができるかもしれない。しかし、中上級レベルとなるととてもそれでは済まされないし、済ませてはいけない。そこで納得のいく説明を求めて、手当たり次第に文法書を読みあさってみたととしても、そこに書かれているのは、「テイルには「継続」「結果」「習慣」「反復」等々の意味がある」といった、あのお馴染みの用法の列挙ばかりである。

用法とは表出された文を手掛かりにした意味機能の分類である。つまり、書かれた文を見て、後付け的に分類したらこれこれのはたらきがあるといえるというものである。こういった後付け的な作業の産物は、学習者の運用能力をつけるためにはあまり役に立たない。これは、例えば、テイル形式に継続の意味があるからといって、学習者が継続の意味を表したい場合には必ずテイル形式を使用しなければならないわけではないことから明らかだろう。では、学習者の運用能力をつけるにはどのような説明が必要とされるのか。それには、その形式が産出されるメカニズムを解明することが必要である。つまり、分析要因に言語主体を介入させる必要である。

これまでの言語学では、言葉は、恣意的な記号とみなされており、それ自身では意味がないが、世界のうちの事物と直接に対応することによって意味を獲得すると考えられている。こういった考えの中では、言語主体が意味に介入する余地はない。しかし、意味とは、果たして、言語主体と関係のないところで成立しているのだろうか。否、言葉が意味を持つのは、言葉を用いて何かを意味しようとする人々にとってだけである。言葉の意味は、ある共同体が、その共同体にとってあることを意味するための言葉の使用に基づいているのであり、言語主体が行う解釈の仕方を反映したものなのである。言語主体こそが意味を成立させるのであり、意味の成立は言語主体の介入なしにはあり得ないのである。

時制を表示するとされる文法形式が時制以外の意味を表すことは、多くの言語で指摘されていることであり、日本語にも如実にその現象が表れている。テイル形式についていえば、一般に現在を表すとされる「彼はその本を読んでいる」は、「一週間前に」「明日の今頃」という過去、未来の時間表現とも共起する。つまり、あらゆる時制を指示するのであり、果たしてこれは時制を指示するといえるのだろうか。このような現象は、一つの言語形式が文脈によってさまざまな意味機能を呈するという点において、多義性¹の構造をめぐる問題と同一である。多義性の解明には、いわゆるせまい意味での文法的な知識にかかわる能

テイル形式の認知的意味

力だけでなく、言葉の創造性や拡張にかかわる能力を、人間の認知能力から包括的に捉え直していくアプローチが必要とされており、最近の認知言語学ではその研究成果が挙げられている。

一つの形式が多様な意味機能を示すという一対多の形式と意味との関係は学習者には理解しにくいものであり、さらに、その運用となると困難を極める。しかし、こういった言語主体の認知的観点からの意味機能の把握は、まさに表現の産出メカニズムの解明に繋がるものであり、語学教育に大いに貢献すると思われる。そこで、本稿では従来の文法研究からパラダイム転換し、学習者の運用能力の向上を目的に、形式と意味の一対多の産出メカニズムの解明を目指すべく、分析に言語主体を介入させることによってテイル形式の意味機能の統一的説明を試みる。結果、テイル形式が、言語主体が事象の成立を心的に自己と同位置にあると解釈するという、言語主体の認識態度を反映する意味機能であることを説明する。

2. 多義性

テイル形式に様々な意味機能があることは、既に多くの研究者が指摘しているところであり、先行研究での分類の仕方に大きな違いはない。例えば、寺村 (1984) では以下のように分類している。

1. 既存の結果が現在存在していること
 - (a) 継続 (開始の結果) : (1) 赤ん坊が泣いている。
 - (b) 結果の状態 (完了の結果) : (2) 金魚が死んでいる。
2. 現在の習慣 : (3) 父はこの頃6時に起きている。
3. 集団としての現象の継続 : (4) アフリカでは、毎日数万の人が食糧不足のために死んでいる。
4. 現在に意義をもつ過去の事象 : (5) 犯人が捜査当局に挑戦していることがはっきりした。読売新聞社への電話は犯人から四回かかっている。(松本清張「現代の犯罪」)
5. 形容詞的動詞の～テイル : (6) あの人はずいぶんふとっているね。

(寺村1984 : 123-146)

テイル形式の意味機能の研究は、金田一 (1976) が出発点となっており、そこでは、動詞が、テイル形式をとるかをとらないか、とる場合にはテイル形式がどのような意味を表すかによって、「状態動詞」「継続動詞」「瞬間動詞」「第四種の動詞」に四分類され、アスペクトの観点から説明されている。従来、国語動詞の分類といえば、「自動詞と他動詞」「意

志動詞と無意志動詞」「独立動詞と補助動詞」「完全動詞と不完全動詞」といった捉え方が一般であったため、このような時間幅の観点から捉えた動詞分類は画期的なものだったのだろう、これ以降のテイル形式の研究では、アスペクトの観点から捉えるのが通説となっており（藤井（1966）吉川（1973）町田（1985）工藤（1995）金水（2000）等）、上述の寺村もその展開となっている。上述の分類を説明すると、1がテイル形式の基本的用法であり、テイル形式が継続動詞につくと「継続」、瞬間動詞につくと「結果の状態」となる。2,3の用法は、他の研究では「反復」という名称で分類されることも多い。5は、金田一（同）の「時間の観念を含まず、ある状態を帯びることを表す」と同一の現象を指す。

これら少数の例からさえもテイル形式の持つ意味の多義性は明らかである。しかし、同時に、以上の分類からは、多義性を統括する共通要因として「現在」が機能していることも観察され、多義性が表出される根幹に「現在」という要因がなんらかの形で関与していると想定できる。そこで、次節からは、「現在」と事象の関係からそれぞれの用法間の連関関係を考えることにより多義性の構図を明らかにし、多義性を産出するテイル形式の本質的意味機能について考える。

3. スキーマとしての「現在」

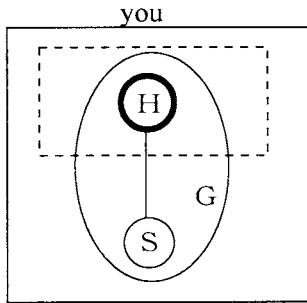
われわれは日々、具体的な経験に基づいて様々なイメージを形作りつつ、また、一方でその経験を抽象化・構造化して知識形態として保存し、対象の理解を促進する規範や類型としてはたらかせている。こうした種々の身体経験をもとに形成されたイメージをより高次に抽象化・構造化し、拡張を動機づける規範となるような知識形態をイメージ・スキーマという。思考・行動のすべてが自己の持つイメージ・スキーマによって支配されているといっても過言ではなく、われわれの日常生活の主要要因と思われがちな「現在、過去、未来」という時間観念も当然その支配下にあるとみなされる。そこで、分析に先立って、ここでは、言語主体が事象の成立を「現在」と認識する際のスキーマについて考える。

テンスはダイクシスである。ダイクシスとは、発話の場面との関連においてのみ了解が成り立つような言語表現の特質のことであり、指示詞や時制辞等が該当する。本稿では、発話の場面を、ある表現を発する話者やその聞き手、さらにその表現が発せられる時間や場所も含め、発話という事象に関わる要素を統合的に指す概念として捉え、それをグラウンドと呼ぶことにする。ダイクティック表現とグラウンドとは、ダイクティック表現を説明するためには、必ずグラウンド概念を導入しなければならないという関係にある。

さて、「現在」とグラウンドとの関係について説明しようと思うが、「現在」のように目に見えない概念を表す表現とグラウンドの関係は分かりづらいため、まず、同じダイク

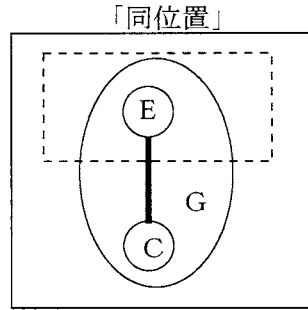
テイル形式の認知的意味

ティック表現でも、目に見えるものを指示する表現である代名詞 you について説明する。代名詞 you とグラウンドとの関係は図1で表される。



(図 1)

(Langacker : 1991)



(図 2)

SとHは話者と聞き手、Gはグラウンドを意味する。破線の四角はステージを表す。SとHを結ぶ細線は、SとHが同じGに位置していると認識するという、Sの認識態度を示す。SとHは、観客と観客によって見られる対象の関係にあり、観客であるSはステージ上のHに意識を焦点化する。Hに意識が焦点化されていることが、Hを囲むまるが太線になっていることで表されている。Sの心的行為の結果の指示対象の言語化がyouとなる。つまり、youが意味を持つためには、まず、言語表現には現れない話者の存在が前提となる。話者は自己の位置するグラウンドと同位置の時空に位置づけられている一人（複数）に意識を焦点化し、それを指示するという心的行為を行う。この心的行為の言語化がyouである。

you の場合と同じ心的行為が、事象を「現在」の事象として捉えるという行為においても行われる。それを図式化したものが図2である。図1のSとHの関係が、図2ではCとEの関係に置き換えられる。Cが概念主体、Eが事象を意味する。図1と図2は構図としては相同関係にあり、焦点化される部分のみが異なる。youの場合はステージ上の対象物が焦点化されていたが、「現在」の場合は、概念主体が事象を認識する際の、主体と事象との位置関係が焦点化される。つまり、概念主体がグラウンドに位置し、自己の位置するグラウンドと同じグラウンドで事象の成立を認識するところまではyouと同じだが、「現在」で認識の際に焦点化されているのは、対象となる事象ではなく、自己と事象が同じグラウンドに在るという「同位置」性である。グラウンドとは、先に述べたように、ある表現を発する話者やその聞き手、さらにその表現が発せられる時間や場所も含め、発話という事象に関わる要素を統合的に指す概念であることから、「同位置」であるということは、空間的にも時間的にも同位置であることを意味し、「時間関係」が取り立てて焦点化されると「現在」という要因が意識化されるのである²。

要するに、事象が「現在」の成立として言語化されるには次のような心的行為が行われる。

まず、前提として言語表現には現れない話者が存在しなければならない。そしてその話者が、自己の位置するグラウンドにある事象の一つを取り立てて指示し、自己の今ココで事象の成立を認識するという心的行為を行うのである。ここで重要なことは、このスキーマが表しているのは、話者が事象の成立を認識するという話者の認識態度であり、事象に参与する何かではないということである。つまり、話者は自己の今ココに事象を位置づけて「事象の成立」を認識するが、その成立は事象が現実成立しているかどうかではなく、言語主体がその事象を成立しているとして解釈することを意味しているのである。現実世界の事実の問題ではなく、解釈の問題である。この心的行為のプロセスにおいて、「同位置」性を構成する要因の一つである時間要因を焦点化し、自己と事象とが同一のグラウンドに時間的同位置にあることを意識化すると初めて「現在」という意識が喚起される。「同位置」認識スキーマは「時間」認識スキーマより優先してはたらくものであり、複数のイメージに構造を与える抽象的なスキーマである。次節では、この「同位置」を認識するイメージスキーマがテイル形式の持つ意味機能にどのような構造を与えているかを考える。

4. テイル形式の意味機能

ここでは、2節で観察した多義のそれぞれを「同位置」認識スキーマに照らし合わせて用法間の関係について考え、新しい研究方法によるテイル形式の意味機能を主張する。

4-1 知覚判断

まず、テイル形式の基本的用法として挙げられている「1. 既存の結果が現在存在していること」について考える。

- (1) 赤ん坊が泣いている。(継続 (開始の結果))
- (2) 金魚が死んでいる。(結果の状態 (完了の結果))

アスペクトの観点からは、(1) (2) の相違はテイル形式がつく動詞の種類に依るものであり、(1) は、「動詞が、本来時間的な幅をもつ動作、現象であるとき、その～テイルは、その動作、現象が始まって、終わらずに今現在している、つまり開始の結果が今もある、という意味を持つのがふつうである」(寺村 (同: 12))。また、(2) は、「瞬間動詞とされるもの、つまり本来、始まると同時に終わるような現象を表す動詞の場合、～テイルは、(当然) その現象が既に実現した、つまり終わってしまったが、その結果 (痕跡) が物理的にあるいは心理的に、現在存在するというを表す。」(寺村 (同)) と説明されている。たしかに、(1) の場合、「赤ん坊が泣く」という事象を、話者とは関係のない客観的な事象

テイル形式の認知的意味

として捉え、動詞の時間幅との関係からテイル形式の意味を説明した場合、こういった説明は適切といえよう。しかし同じ「泣いている」でも、(1)'のように、頬に涙の跡を残してすやすや眠っている赤ん坊を見た時の発話とすればテイル形式の意味機能は異なる。

(1)'たしかにこの赤ん坊は泣いている。

(1)'を、「赤ん坊が泣く」という事象を、話者とは関係のない客観的な事象として捉え、動詞の時間幅との関係からテイル形式の意味を説明すれば、「その現象が既に実現した、つまり終わってしまったが、その結果（痕跡）が物理的に存在するということを表す」となるだろう。継続動詞についてのテイル形式でありながら、瞬間動詞についてのテイル形式の意味機能を果たしているのである。つまり、意味機能が文脈によって決定されているのである。動詞の種類で意味機能を分類しておきながら、その意味機能を最終的には文脈が決定するというのであれば、動詞の種類による分類の価値は何だったのだろうか。

このように、事象を言語主体とは関係なく客観的なものとして捉えると、矛盾を含んだ説明を余儀なくされる現象も、言語主体の認識態度の観点から捉え直せば、(1)と(1)'は「知覚判断」という共通項で統一的な説明が可能である。(1)では、泣き声を聞くという聴覚判断で、「赤ん坊が泣く」という事象の成立を、主体が自己の今ココで解釈しているのである。一方、(1)'では、「泣く」という行為が目の前で起こっているわけではなく、涙の跡という視覚情報を手がかりに、話者が、「赤ん坊が泣く」という事象の成立を、自己の今ココで解釈しているのである。これと同じことが(2)でもいえる。金魚鉢の水の表面に白い腹を見せ、ぷっかり浮かんだ金魚を見た話者が、その視覚情報を手がかりに、「金魚が死ぬ」という事象の成立を自己の今ココで解釈しているのである。

つまり、(1)(1)'(2)ともに、テイル形式が示しているのは、事象の成立時間、さらにいえば、事象に関与する何かではない。そうではなく、テイル形式が示しているのは、話者が事象の成立を、知覚を手掛かりに、自己の今ココで解釈する、という話者の認識態度である。このような言語主体の認識態度とテイル形式との関係を「同位置」認識スキーマは次のように説明する。まず、前提としてグラウンドに位置する言語主体が存在し、その言語主体が自己の知覚判断により、目の前のステージ上での事象の成立を解釈するという心的行為を行う。成立認識の判断が自己の知覚という身体性に依るものであることから、成立が解釈された事象と主体とは自ずと時空ともに「同位置」に在ることとなる。その同位置性の認識を(1)(1)'(2)では、テイル形式が反映しているのである。(1)(1)'(2)が「現在」を意味していると考えられる場合は、話者は解釈の際にとりわけ時間要因を焦点化していることになる。

テイル形式の特殊な用法と考えられている「5. 形容詞的動詞の～テイル」も、これまで

述べてきた、知覚を手掛かりとしたグラウンドでの事象成立認識という考え方を採れば問題なく説明できる。

(6) あの人はずいぶんふとっているね。

(6) は、グラウンドに同位置する話者が聞き手に向かい、両者の共通の視覚対象となっている「あの人」の格好について視覚情報を手掛かりに事象の成立を解釈しているのである。また、「同位置」性の時間要因が拡大されたのが「2. 現在の習慣」である。

(3) 父はこの頃6時に起きている。

グラウンドを構成する時間要素は、ふつう「今」であり、極めて狭い時間幅が要求されるが、「この頃」「最近」³のように「今」を含んだものであれば、グラウンド要素として許容される。なお、現在の習慣は、テイル形式に限らず、辞書形でも表せるが、両者の相違は、話者が事象の成立を自己の今ココで捉えて言語化しているか、事象の成立には関与せず、一種のコトガラ⁴として捉えて言語化しているかの相違である。

また、(3) では、「この頃」という拡大された時間幅と「6時に」という点としての時間が共起しているため、それらによって修飾される動作には反復のイメージが喚起される。動作の反復に付加されたテイル形式は、話者が一連の反復を1つの事象と捉え、自己の今ココでその成立を認識していることを示している。このような反復認識は、「3. 集団としての現象の継続」にある(4)の例文の、テイル形式の一面を説明するものである。しかし、(4) に関してはさらなる説明が必要となるため、事項でも説明する。

さらに、知覚判断による事象の位置づけが顕著に表れる現象として次の例を挙げることができる。

(7) この絵は実にうまく描けている。

金田一(同)では、可能動詞へのテイル形式の付加はできないとされている。しかし、(7) はどうだろう。描かれた絵を見ての視覚情報を手掛かりに、話者が自己の今ココで「この絵が描ける」ことが「実にうまく」成立していると解釈しているのである。

4-2 引き込み

「4. 現在に意義をもつ過去の事象」について考えてみる。

(5) 犯人が捜査当局に挑戦していることがはっきりした。読売新聞社への電話は犯人から四回かかっている。

テイル形式の認知的意味

(5) では、「電話が犯人からかかる」という事象の成立を根拠に「犯人が捜査当局に挑戦していることがはっきりした」という結論づけを行っていることから、「電話が犯人からかかっている」のテイル形式には現在の意味が課せられていないことが明らかである。このテイル形式は、事象が過去の成立であることは承知の上で、それをたんなる過去の事象として捉えるのではなく、自分の出した結論の根拠として、自己の今ココでその成立を解釈する話者の認識態度を表している。

このようなテイル形式は、グラウンドには位置していない事象を、自己の位置するグラウンドへと〈引き込み〉、自己と同位置に据え付け、自己の今ココで事象の成立を解釈するという、話者の認識行為を反映するものである。先の「反復」のところで述べた(4)のテイル形式にもこの〈引き込み〉意識が反映している。

(4) アフリカでは、毎日数万の人が食糧不足のために死んでいる。

目の前の新聞記事を情報源として(4)を発話し、その際に時間要因を焦点化したとすれば、テイル形式は「現在」を意味することとなる。しかし、いつか見た雑誌の写真など、過去の情報源を手掛かりにしての発話であれば、過去に成立を認識した事象を、今再び、グラウンドへ〈引き込み〉、自己のイマココでその成立を解釈しているのである。また、〈引き込み〉は回想のイメージを喚起することもある。

(5)′ 五年前にも私はここに来ている。

(5) も(5)′ もテイル形式のはたらきは、過去に成立した事象をグラウンドへ引き込んで話者の今ココでその事象の成立を解釈するという点では同一である。しかし、両者を比較した場合、より際だって認識される部分に異なりが生じる。(5)では、既に述べてきているように、同位置性が焦点化されているが、(5)′では、同位置性が焦点化されると同時に、事象の内容にも焦点が当てられる。そのため(5)では認識態度の様相を表す「確信」、(5)′では「懐かしい」「もう一度その事象を体験したい」などという内容を志向する感情が喚起される。また、〈引き込み〉は過去の事象とは限らない。次に示すような未来の事象も話者はグラウンドへ引き込むことが可能である。

(5)″ 「明日の今頃は、友達とテニスをしているわ。」

「友達とテニスをする」という事象の成立が「明日の今頃」という未来であることを、話者は自己の今ココで解釈しているのである。これは、「(?) 明日の今頃は、友達とテニスをするわ。」という辞書形と比較してみると分かりやすいだろう。辞書形での言語化は、先

の現在の習慣のところでは述べたように、事象をコトガラとして提示するものであり、その成立に話者はなんら関与しないことから、事象が実現するかどうかは定かではなく、たんなる「予定」のイメージが強く出る。一方、テイル形式の場合は話者が事象の成立に関与するため、話者が事象の成立に「確信」を持っているイメージとなる。

さらに、事象の〈取り込み〉は、次の現象も説明する。「思う」「信じる」「考える」「疑う」などの思考を意味する動詞は、主語が三人称で発話時点における成立を示すには、テイル形式を必ず付加しなければならない。

(7)* 太郎は次郎が学生だと思う。

(8) 太郎は次郎が学生だと思っている。

(8) では、「太郎」という第三者が「次郎が学生だ」という内容を思考する」という事象の成立を、話者が自己の今ココで解釈している。話者が第三者の思考内容を直接認識することは不可能である。そのため、思考主体にとっての思考内容の真偽とは別に、話者の視点で第三者の思考内容を解釈しているのである。思考内容という目に見えない事項に関与した事象をグラウンドへ〈取り込み〉、その成立を解釈するというこの心的行為は、〈取り込み〉のなかでも抽象度の高いものであり、過去や未来の事象の〈取り込み〉から拡張されたはたらきといえよう。

4-3 グラウンドシフト

グラウンドとは、本来、現実世界において話者の立脚する今ココを意味する位置であり、〈引き込み〉の場合は、グラウンドで成立していない事象をグラウンドへと引き込んで、その成立を話者の今ココで解釈する心的行為であるが、それとは全く逆の心的行為がなされることがある。それがグラウンドシフトである。つまり、話者がグラウンドに位置することに変わりはないが、話者は、自己の立脚する今ココから遠隔に位置する別の事象の成立を認識し、その事象成立位置にグラウンドを移動させる。したがって、そこでのグラウンドは発話の場ではなく、話者が心的に位置する場である。話者は、移動させたグラウンドで新規の事象成立を自己の今ココで解釈するというものである。

(9) 今度会ったときには、立派な画家になっているわ。

(9) では、「今度会ったとき」という条件節によって非現実の時空が設定される。話者はグラウンドをその設定された時空へと移行させ、そこをグラウンドとし、「立派な画家になる」という事象の成立を、自己の今ココで認識しているのである。このようなグラウンド

テイル形式の認知的意味

シフトは、条件節や仮定節の後件文、それに連文の中に現れ、日常の言語活動でも頻繁に行われるが、小説の技法としても定着しており、史的現在と呼ばれている。

この倫敦塔を塔橋の上からテムス河を隔てて目の前に望んだとき、余は今の人か
將た古えの人かと思うまで我を忘れて余念もなく眺め入った。冬の初めとはいいなが
ら物静かな日である。(10) 空は灰汁桶を掻き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ
懸っている。

(夏目漱石「倫敦塔」)

語り手によって、小説世界の事実がたんと述べられるなか、(10) では、作中人物「余」の視点で空の情景が描写されている。語り手が作中世界にグラウンドを移行し、作中人物の「余」の視点で捉えてた描写であることをテイル形式が示している⁵。

4-4 結論

テイル形式の意味機能は、話者が、自己の位置するグラウンドと同位置にある事象の一つを取り立てて指示し、その事象の成立を自己の今ココで認識するという「同位置」認識スキーマの実現を反映するものであり、多義性は、その実現の仕方のバリエーションによって表出するものである。

核となる認識プロセスでは、話者が知覚を手掛かりに、グラウンド内に位置する事象の成立を自己の今ココで認識するというものであり、認識の際に同位置性を構成する要因である時間要因が焦点化されると「現在」という意味機能が表出する。ここで重要なことが2点ある。まず1点は、テイル形式が反映するのは、話者が事象の成立を解釈するという話者の認識態度であり、事象に関与する何かではないということである。つまり、テイル形式では「事象の成立」が表されるが、その成立は事象が現実⁶に成立しているかどうかではなく、言語主体がその事象を成立しているとして解釈することを意味しているのである。2点目は、認識態度とテンスとの関係である。時間に追われ、忙しい毎日を送るわれわれは、時間こそが認識の最優先要因だと考えがちである。しかし、深く内省すれば明らかのように、テンスとは、事象認識に時間要素が加味された後に表出するものである。話者はグラウンドに位置して事象を解釈するのであるが、解釈の際に時間要因が加味されると、グラウンドが基準時点となり、時間が過去、現在、未来に区切られる。つまり、ここではじめてテンスという概念が発生するのである。

この核となる認知プロセスが二種類に拡張される。一つが、グラウンドの外に位置する事象を〈引き込み〉操作によってグラウンドに位置づける心的行為である。従来、テイル形式が過去も未来も指示するといわれるのは、引き込まれる前の事象の成立時点に着目し

た結果である。しかし、それはテイル形式の意味機能ではない。話者はあくまでも現実の今ココに立脚し、そこで事象の成立を解釈することから、認識態度をとりたてた「確信」や事象内容に重きを置いた「回想」のイメージが喚起されることがある。もう一つが、〈引き込み〉とは反対に、話者が自己の立脚する今ココから遠隔に位置する別の事象の成立を認識し、その事象成立位置にグラウンドを移動させ、移動させたそこで新規の事象成立を自己の今ココで解釈するというものである。条件節や假定節の後件に現れるテイル形式や、文章の中でもタ形式とタ形式のあいだのテイル形式はこの役目を担っている。

言葉はプリズムである。光の当て方によって多彩な色を放つ。従来の言語研究とは異なり、言語主体に光を当て、実際の言語使用の場から立ち現れてくるスキーマとして規則を捉え直し、テイル形式の意味機能の統合的説明を試みた。

5. むすびにかえて

言葉を自立的な知識として、記述・説明の対象としているかぎり、言語教育に貢献する言語研究はすすまないだろう。従来の研究パラダイムを一転させ、言葉の背後に存在する主体の認知メカニズムと運用のメカニズムが解明されれば、これまでの文法重視、規則重視の教授法を越え、運用能力をつけるのに効果的な科学的で体系的な言語教育のアプローチが可能となることは間違いない。言語現象をたんなる記号の組み合わせに基づく抽象的な記号体系として分析するのではなく、言語主体の認知能力や運用能力との関連でダイナミックに探求していくという視点を持つことこそが、今後の日本語教育のための日本語分析に必要とされる姿勢である。

(注)

- 1 単一の語が体系的に関係づけられた多くの意味を持つという現象。何故多義性が生じるのかについて、最近の認知言語学では、意味どうしの間で見られる動機づけと比喻拡張の観点からの研究成果が多く見られる。
- 2 現実世界での事象認識における事象と時間との関係についてはLangacker (1991) で詳説されている。
- 3 「毎日」の場合も今という時点を含む場合にはグラウンド要素の拡大となる。
- 4 ル形式の場合（例えば「読む」）、事象に対する話者の関与は全くない。
- 5 山本 (2004) で詳述。

【参考文献】

- Brisard, Frank. 2002. *Grounding: the epistemic footing of deixis and reference*. Mouton de Gruyter
- 藤井正. 1966. 「『動詞＋ている』の意味」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 金水敏. 2000. 「時の表現」『時・否定と取り立て』岩波書店
- 金田一春彦. 1976. 「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar II*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter
- 町田健. 1989. 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山本雅子. 2004. 「語りのパースペクティヴ」『言語と文化』愛知大学外国語研究室
- 吉川武時. 1973 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房